

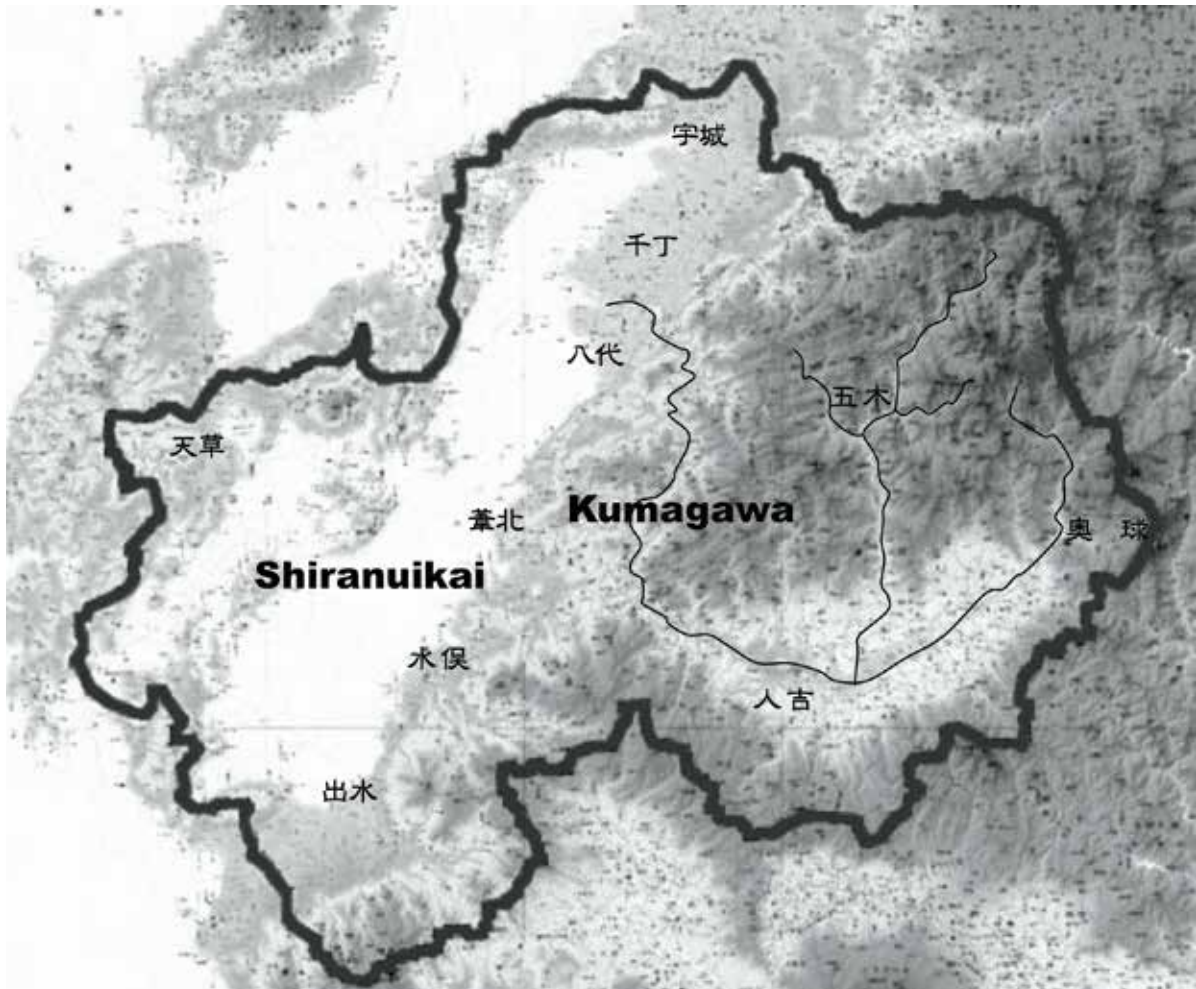
# らくぬいま

第23号

2017年5月

## 内容

- 平成29年度 総会報告
- 平成28年度 会計報告
- 平成29年度 予算案
- 平成28年度「残したい水ものがたり」選定地報告
- 平成29年度 研究発表会報告
- 現地見学会報告「宇土の歴史と文化を巡る」
- 平成29年度第2回 現地見学会案内
- 相良村「カッパの墓」!? 伝説
- 球磨川流域の山歩記 第4回・白髪岳
- 本の紹介：「肥後の歴史と球磨 その原史世界に魅せられし人々」「日本の木と伝統工芸」「貝と文明」
- 会員紹介
- 「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売案内



不知火海・球磨川流域圏学会事務局

熊本県熊本市南区城南町東阿高 1136-6

Tel & Fax : 0964-26-2003

# 平成 29 年度総会報告

日時：平成 29 年 6 月 4 日（日）午前 10 時 30 分  
会場：熊本県立大学 CPDセンター  
参加者：41 名（出席 23 名+委任状 19 名）  
議長：高橋徹

今年で第 12 年目となる本学会総会が、熊本県立大学において開催されました。議事に先立ち、堤会長から、「学会の活動を通して、川があると、そこには歴史や文化があることに、毎回いくつもの新しい発見がある。大きな学会ではないけれど、着実に成果を残している」と挨拶がありました。

## 1. 平成 28 年度事業報告

### ① 平成 28 年度大会

総会 日時及び会場：6 月 5 日  
熊本水産研究センター 1F 研修室  
研究発表会 日時及び会場：6 月 5 日  
※ 5P 参照  
熊本水産研究センター 1F 研修室



総会の様子

### ② 第 1 回現地見学会 6 月 4 日

「天草探訪」 参加者：20 名  
コース：三角東港→登立天満宮→松島（天  
草五橋クルージング）→永浦島→高杵島



第 1 回現地見学会「天草探訪」

### ③ 第 2 回現地見学会 10 月 23 日

「熊本地震・益城町巡検」 参加者：23 名  
午前中：室内学習（講師：佐賀大学低平  
地沿岸海域センター研究員 山下正一氏）  
午 後：今回の地震で地表に断層が現れ  
た地点見学（益城町木山 木山神  
宮→木山の活断層点→益城町堂  
園の活断層→ 益城町の覚田断  
層）



第 2 回現地見学会「熊本地震・益城町巡検」

### ④ 事業「残したい水ものがたり」第 2 回目推薦地公 募、及び候補地選定 ※ 4P 参照

### ⑤ ニュースレター発行 年 2 回 （第 21 号 9 月、第 22 号 5 月）

### ⑥ 学会誌発行 Vol.10 平成 29 年 8 月発行

### ⑦ 理事会開催（6 回）

平成 28 年 8 月 5 日、10 月 14 日、12 月 10 日

平成 29 年 3 月 3 日、4 月 7 日、5 月 19 日



会場づくり風景

## 2. 平成 28 年度会計報告

28 年度決算

(収入)			
名 目	内 容	金 額	備 考
会費	3000 × 61 名	183,000	
利息		9	
繰越金		2,925	
雑収入	学会誌販売	1,500	
	発表会参加費&寄付	52,000	書き損じはがき含
		239,434	
名 目	内 容	金 額	備 考
郵便代	はがき・送料	24,886	
学会誌作成		108,520	前年度不足分 28,520 28年度分 80,000
ニュースレター作成	2 回	60,600	
事務経費	コピーチラシ	16,361	新聞折込含
HP 維持費		5,000	
会場費		0	
雑費	講師謝礼	10,000	
	見学会不足分	5,000	
繰越残高		9,067	預金・口座
計		239,434	

監査 沢畑亨 5月31日

## 3. 平成 29 年度事業計画

### ① 平成 29 年度大会

総会 日時及び会場：6月4日（日）

研究発表会 日時及び会場：6月5日（日）

熊本県立大学 CPDセンター

### ② 第 1 回現地見学会

6月3日（土）「宇土の歴史と文化を巡る」

※ 6p 現地見学会報告参照

### ③ 第 2 回現地見学会

10月15日（日）「小川町と砂川流域の歴史と文化を辿る」

### ④ 「残したい水ものがたり」第 3 回目 推薦地公募及び候補地選定

### ⑤ ニュースレター発行

年 2 回（ 第 23 号 9 月、第 24 号 4 月発行予定 ）

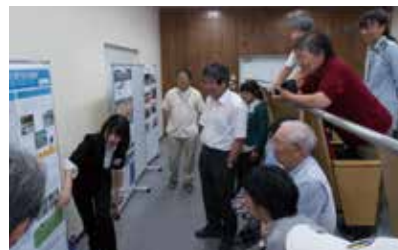
### ⑥ 学会誌 vol.11 発行

平成 28 年 8 月末日発行予定

### ⑦ 理事会開催 6 回／年

### ⑧ 会員拡大

目標 130 名（平成 29 年 6 月 1 日現在 会員 90 名）



ポスター発表の様子

#### 4. 平成 29 年度予算案

(収入の部)			
名 目	内 容	金 額	備 考
個人会費	3 0 0 0 円× 90 名	270,000	
団体会費		0	
繰越金		9,067	
雑収入	学会誌・PDF 販売等	10,000	
	発表会参加費 寄付金	50,000	
計		339,067	
(支出の部)			
名 目	内 容	金 額	備 考
郵便代	[(100 × 3) + 62] × 90 名	32,580	発送+ハガキ
学会誌作成費	印刷	100,000	
学会誌編集費	編集	30,000	
コンピュータ作成	2 回/年	50,000	
事務経費		30,000	コピー、チラシ等
H P 維持費		5,000	
会場費	会場費	10,000	役員会・総会・発表会
雑費	講師謝礼	10,000	
予備費		71,487	
計		339,067	

#### 5. 平成 28 年度「残したい水ものがたり」選定地報告

今年で 2 年目になる「残したい水ものがたり」事業は、「残したい水ものがたり」審査委員会から以下の 4 カ所の推薦があり、本年度大会において承認されました。結果は以下の通りです。詳細は、学会誌 vol.12 において報告いたします。

- 1 湯堂のゆうひら 水俣市袋湾 海底湧水地
- 2 百済来川下流 八代市坂本町川嶽 元荒瀬ダム湖であった区間
- 3 砂川の旧河川跡地 宇城市小川町
- 4 水無川の子供の遊び場 八代市妙見町 ホタルの里公園

湯堂のゆうひら



百済来川下流



砂川の旧河川跡地



水無川の子供の遊び場



# 平成 29 年度研究発表会報告

今年の研究発表会は、昨年の熊本地震を受け、熊本地震や阿蘇火山噴火などに関する報告を主に発表していただきました。詳細は、学会誌次号にて報告させていただきます。

## ■基調講演

「熊本県の地震の特徴について」

藤芳泰則氏（熊本地方気象台地震津波防災官）



藤芳泰則氏



渡辺伸一郎氏

## ■研究発表（口頭発表）

- ①「熊本地震と阿蘇火山 ～この1年を振り返り、これからの見つめる」  
池辺伸一郎（（公財）阿蘇火山博物館 館長）
- ②「被災者と共に震災に向き合った14号館避難所の45日間」  
宮北隆志（熊本学園大学社会福祉学部福祉環境学科 教授）
- ③「今後、日本列島で起こり得る大災害」  
山口久臣（RQ九州代表 &（一社）アイ・オー・イー代表理事）
- ④「2016年夏季に八代海で発生したシャットネラ赤潮の発生要因」  
鬼塚剛（国立研究開発法人水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所）
- ⑤「宇土市船場の眼鏡橋の復旧」  
藤本貴仁（宇土市教育委員会文化課）
- ⑥「麦島城崩壊～400年前に何が起こったか～」  
山内淳司（八代市経済文化交流部文化振興課主任）
- ⑦「熊本地震への県立大学の対応」  
佐藤忠文・野口慎吾（熊本県立大学 COC 推進室）



宮北隆志氏



山口久臣氏



鬼塚剛氏

## ■（研究発表）ポスター発表

- ① 天草 河内川における生物調査  
上野 由里代・森山 聡之（福岡工業大学 社会環境学部 社会環境学科）・正角 雅代（天草海部）
- ② 佐敷干潟にアサリを復活させるための対策  
堤 裕昭（熊本県大・環境共生）・西岡祐玖・北川 昇（熊本県大院・環境共生）・藤芳義裕（FU バイオカルチャー）・小森田智大・一宮睦雄（熊本県大・環境共生）・八里政夫・小崎盛行（芦北町漁業協同組合）
- ③ 河口干潟に生息するホトトギスガイが成長しやすい底質環境に関して  
竹中 理佐（熊本県立大学大学院 環境共生学研究科）
- ④ 熊本地震 2016：避難所から被災地へ ―熊本学園大学の取り組み―  
宮北隆志（熊本学園大学社会福祉学部福祉環境学科 教授）



藤本貴仁氏



山内淳司氏



佐藤忠文氏

## 宇土の歴史と文化を巡る



今回の現地見学会は「宇土の歴史と文化を巡る」ということで、6月3日（土）に宇土市民会館駐車場より出発して午後4時まで宇土市内を散策しました。



当日は好天にも恵まれ会員25名の参加がありました。昼食後からは宇土市文化課の芥川様と大波様が同行していただき、更に詳しい宇土市内の説明がありました。本当に縄文時代や古墳時代からの歴史を体験することが出来、企画していただいた佐藤先生を始め宇土市の職員の方々に厚く御礼申し上げます。

午前は淡島神社より見学が始まりました。途中宇土市内の浜度川を通過した折、この川は本来、緑川であり、洪水対策のため緑川の河川改修を行って緑川を直線にしたため、この川が残ったとの説明がありました。淡島神社は安産の神社だそうで神社に置かれている小さい鳥居を通過すると安産と無病息災の御利益があるとのことで皆さん大変興味を持ち必死に鳥居を通過していました。境内はお宮参りの初詣の方々に満ちており、他の神社で

はあまり見かけない犬印妊婦帯が置いてあったのが印象的でした。



次に住吉神社に向かいました。三角西港には世界遺産にもなったため、よく行く人が多いのですが、この神社はその途中にありながら、紫陽花をながめるために行く人がある程度でこの島が伊勢物語や枕草子にも載っているような有名な神社であるとは思っていませんでした。また、神社沖合のたはれ島は海洋航行の重要な役割を担っており忘れ去られた名所である気が致しました。神社境内にキャサリン・メアリー・ジルの祈念碑がありましたが、ここから海苔の養殖が始まったと思うと、この神社をもう少し観光地化しても良いのではないかと思います。残念な気持ちになりました。

ここでお昼になり、あじさいの湯で昼食となりました。昼はとんかつ定食で食後に小和田先生がソフトクリームを差し入れて下さいました。

午後からは宇土市文化課の芥川様と大波様が先導し、



大歳神社の見学から始まりました。この鳥居は地元で取れるまどか石という阿蘇山噴火で作られたピンク色の石で作られており、古墳時代の京都、奈良、大阪の古墳の棺がここから船で運ばれたとのこと。その実証のため当時の船を作成し棺を作り大阪まで実際に運んでみたとのこと、時代のロマンを感じるようになりました。



次に向かったのが轟水源で、日本名水百選の一つにもなっており常時水温18度とのことでした。当日は暑いのと

土曜日だったこともあり家族連れで大変賑わっております。この水源から宇土市内に水を引くために1663年熊本細川家の支藩が水道を宇土市内まで4.8km通したとのこと、その技術力に感服いたしました。最初は瓦質制であったのですが割れて水漏れが多くまどか石製に交換していき、現在でも市内100軒の方が使用しており、年間の水道料金が使用放題で1万円と言われたときには、東京の玉川上水のことが思い浮かび、都市と水との関係は非常に大切だと思いました。

帰りがけの途中に轟貝塚に因りましたが、民有地でもあり不通の人は何故ここに大量の貝殻が存在しているのか興味がないようで、貝塚を整地して売地63坪と書いてあったのがとても残念に思いました。史跡の保存には住民への啓発とその意義



を知らせる教育が大切だと思いました。ここで、土器の文様と貝の関係を説明いただき皆さんがいたく貝に興味を示し暫く貝談義に花が咲いていました。

次に向かったのが宇土市大太鼓収蔵館で、昔から雨乞いのために宇土市では大太鼓を作り、それを打ってお祈りしたそ



うです。現在も江戸時代からの大太鼓が数多く残っており大太鼓を叩いた後の残響音に圧倒されました。現在では保存会の皆様が大太鼓を叩いて市民の方に披露されているそうです。この行事を盛大にすれば観光客も数多く集まるのではないかと思いますもう一工夫すれば町の活性化につながるのではないかと思います。



最後に宇土市内に戻って、町人町と武家町の成り立ち轟水源からの水道の関係を古地図と現代の地図を比較

しながら説明いただき、町の歴史が良く分かりました。一つ残念だったのはただ一軒残っていた武家屋敷の高見邸が先の熊本地震で崩壊し無残な姿になっていたことです。この民家を修復するには多大な時間と労力を必要とするのではないかと思います、市民の文化財への啓発活動が大切だと思いました。



# 平成 29 年度第 2 回現地見学会案内



## 「小川町と砂川流域の歴史と文化を辿る」

砂川は九州山地と八代海を結ぶ重要な河川です。古代律令制の時代には八代郡小河（小川）郷に属していました。中世には、諸勢力がぶつかる場となり、近世（江戸時代）になると、下益城郡の南部、河江手永に属しました。

上流域の海東地区は蒙古襲来絵詞で有名な竹崎秀長が地頭職を得た地です。下流域には港町が成立し、江戸時代にかけて在町として発展しました。その伝統は小川町商店街に受け継がれています。今回の熊本地震で古い町並みは大きく傷つきましたが、その中から活性化の動きも見られ始めました。今回は、そんな砂川流域を巡ります。

日時：10月15日（日） ※詳細は、同封の案内チラシをご参照ください。

集合場所：小川駅 午前9時40分集合

コース：①小川駅（9時40分集合）→9：50 ②川尻の旧河川跡 → 10：30 ③出水地蔵水源 → ④海東の駅（昼食購入）→ 10：45 ⑤塔福寺入り口 → 11：00 ⑥舞鶴文殊堂 → ⑦峠の岩清水（昼食 11：10～12：00）→ 13：00 ⑧平原公園 13：30 → 14：30 ⑨小川町（街並み、風の館、塩屋、阿蘇神社等見学）→ 16：00 小川駅（解散）

参加費：1500円（昼食代込み）

申込締め切り：10月10日

申込先：TEL 0965-32-7140（つる） Email:tsuru-shoko89314@hiz.bbq.jp

※水源を巡りますので、水が汲めます。 ※小雨決行



③ 出水地蔵水源

⑥ 舞鶴文殊堂

⑧ 平原公園

⑧ 平原公園にある竹崎秀長の墓

⑦ 峠の石清水





## 相良村「カッパの墓」!? 伝説

熊本県の南部、清流・川辺川が流れる相良村に「カッパの墓」と呼ばれるものがあります。

川辺地区・廻り（めぐり）集落の路傍に、ひっそりとたたずむ石積みのものであります。由来を記す木製の看板も有り、近くには相良三十三観音めぐりの18番札所「廻り観音」や、川辺川でラフティングなどを楽しむ人の姿もありますが、カッパの墓に気づく人は多くはありません。

もともと、廻り集落の三つの家（村山、矢上、前村）により祀られていたもので、その由来は相良村史にも記してありますので、以下同書より抜粋させていただきます。

昔、村山家の先祖が、夏のある日、川辺川の支流逆巻（さかま）き淵のほとりで馬を洗い、しばらくそこに繋いでいた。ところがいつの間にかカッパが現れ、馬の尻尾をくわえて淵の深みに引き込もうとした。馬のいななきに驚いた村山家の先祖は、馬の手綱を懸命に引っ張って、馬を助けようとした。カッパの方も、負けてたまるかと尻尾を離そうとしない。そのうちとうとう村山家の庭先まで（因みに逆巻き淵から村山家まで約50メートル）来てしまった。

ついにカッパは捕らえられ、馬小屋の柱に縛り付けられた。暑い日が続く、カッパは飢えと渇きに苦しみ、さらにカッパにとって命のつぎに大切な頭の皿の水も無く

なっていた。

その時、気立てのやさしいこの家の下女が不憫に思い、頭の皿に水を注ぎ、縛ってある綱を解き、もとの逆巻き淵に放してやった。

すると翌朝、台所の流しに魚が沢山置いてあるではないか。その話は他の二軒（当時、廻りには村山家のほかには、矢上・前村の両家しかなかった）にも伝わり、皆カッパの恩返しだと不思議に思った。

村山家の者が寝静まったあと、カッパが魚を運ぶ奇妙な行為は、秋の深まる霜月（旧暦11月、新暦では12月ごろ）まで続いた。

ところが、ある朝のこと、件の下女が流しを見ると、魚は一匹も置いてない。三軒の女達は、多分カッパは死んだのだらうと思い、河童の供養塔を建て、供養してやった。以来、霜月のその日（カッパが来なくなった日）を命日としてカッパ祭りが始められたという。（相良村史 人文編 H8.3 発行）

カッパ祭りは、前述の三家の主婦により仏式で行われていたそうですが、昭和39年にカッパ伝説の主・村山家の女主人村山チトさんが亡くなったことを機に自然消滅してしまったそうです。また、カッパの墓はもともと逆巻き淵に最も近い村道のほとりにあったものが、平成7年9月調査のおり、現在の場所に復元されたということです。

カッパの墓



由来が書かれた看板



# 白髪岳



白髪岳は人吉盆地の南側に位置する標高 1416m の山です。この山系に降った雨は分水嶺によって球磨川と川内川水系に流れ込みます。上の写真でいうと、歩いた稜線の手前に降ると川内川、向こうに降ると球磨川水系ということになります。仰烏帽子山、市房山とならんで球磨三山の一峰。冬になると山頂一帯が樹氷に覆われて白く輝くことから白髪岳と呼ばれるようになったという説がありますが定かではありません。

1980年に環境省から自然環境保全地域に指定され、区域内は標高 1300m 前後を境として下部にモミ、ツガ林、上部にブナ林の原生林が残されています。



登山口は標高約 1100 m の林道脇にあり、山頂までの標高差 300 m、これといって危険な箇所もなく木立の中をのんびりと登ることができます。

8月28日、8:45 さあ出発。

明るい木立の中、緩やかな登山道を上ります。踏み跡もしっかりとしていて道に迷うことはありません。

登山道脇の木の幹にはネームプレートが縛り付けられ

ていて勉強になります。ということで、白髪岳の植生講



座～。シラキ、サワグルミ、モミノキ、サルナシ、エゴノキ、アカガシ、ミヤマキリシマ、カナクギノキ、ブナ、ヒメシャラ、ハイノキ、ツルマサキ、ミズメ、シロモジ、ツタウルシ、ツルアジサイ、ハリギリ、サワフタギ、ナツツバキ、イヌガヤ、クマシデ、シキミ、ウリハダカエデ、カマツカ、ニタヤカエデ、ホオノキ、イチイ、の 27 種を確認。ちょっとした植物園ですね。ご苦労様です。



そうこうしているうちに 9:08、3 等三角点がある 1,233m の小ピーク「猪ノ子伏」(いのこぶし) に到着。きっと猪ノ子どもが伏している形に似ているのですが、木が茂っていてよくわかりません。このあたりからモミノキやブナの巨木が現れる尾根道です。



9:37、白髪岳の主（と勝手に呼んでいる）モミノキにつきました。『行こか休もか気モミノ木』と洒落た立て札があります。ということでここで一休み。



少し歩くと登山道沿いに鹿ネットが現れます。白髪岳はもう何年も前から毎年のように登っていますが、登るたびに鹿の食害が目立つようになり、下草や低木が食い荒らされていきました。おかげで森の中でも見晴らしはいいのですが、食害のためか大きなブナの木が墜落したUFOのように巨大な円形の根っこを地面に垂直に広げて何本も倒れていました。



山頂に近づくと尾根には立木が少なくなり乾燥した地面がむき出しになったところも多くなります。



10:15。三池神社に到着。「三池神社は雨の神様として広く球磨地方の人々から信仰されています。」と立て札に書かれています。祭神は鵜葺草葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）等が祀られているそうです。

ここまで来ると山頂はもうすぐ。鞍部から登返していく

とまた鹿柵が現れました。この鹿柵は効果を発揮して



いるようで、柵の内と外では（どちらを外というのかわかりませんが）明らかに違いがあります。以前はこういうスズ竹に覆われた登山道だったと記憶しています。



山頂が見えてきました。山頂には枯れ木が数本あるだけの惨憺たる状況で日光を遮るものが何もなくありません。1,400m とはいえ8月の直射日光はこたえます。



10:35 白髪岳山頂。ここには佐賀県有田市にある黒髪



山から姉妹縁組を記念して有田焼でできたプレートが贈られて設置されています。



山頂からの西方向の眺め。遠く市房山が見えます。帰りは陀来水岳を経由して下山。いい山行きでした。

## 本の紹介



### 「肥後と球磨 その原史世界に魅せられし人々」

- 肥後と球磨の考古学史 -  
木崎康弘

肥後の歴史は、凡そ4万年前に始まった。その後、生業を変えながら、生活様式や人間関係を複雑にしながら、古代、中世、近世、近代、現代へと遷っていった。その間で残された遺跡は、集落跡、墳墓跡、城跡、貝塚、祭祀跡などと多種多様。こうした原史世界に飽くなき探究心を燃やし続けた先輩考古学者たちがいた。

今回上梓した『肥後と球磨、その原史世界に魅せられし人々—肥後と球磨の考古学史—』は、そんな考古学者たちの眼差しの實際を、歴史的なドラマをして跡付けた考古学専門書である。

\* \* \* \* \*

肥後考古学は、貝塚と装飾古墳を調査研究の対象として始まった。日本考古学史の中で嚆矢的な事件となった、1977（明治10）年の東京都大森貝塚の発掘の1年後のことだった。

アメリカ人鉱山学者のライマンは、1878（明治11）年晩秋、肥後を南北に縦断する形で、旅行した。三池から荒尾に入り、玉名、田原坂を経て、熊本入り。その後、川尻から小川、八代、日奈久、葦北、水俣を通過し、薩摩に入った。その途次、薩摩街道沿いに小川を過ぎて大

野村に入ると、夥しい量の貝殻が堆うず高く溜まった崖面を目の当たりにしたのだった。これが大野貝塚の発見だ。また、近くにあった不思議な意匠の石棺の蓋を発見もしていた。そして帰京後の、翌年3月、自宅での夕食会に、日本考古学研究の扉を開いたモースを招き、見つけた貝塚と石棺の話をしたのだった。

こうして3ヶ月後の6月、モースは、大野村を訪れた。二人の間で話題となった貝塚を発掘し、装飾のある石棺を調査するためだった。長く肥後考古学研究の黎明と語られてきたモースの大野貝塚の発掘と装飾古墳の調査だったのだが、こうした背景の中で行われたのだ。その舞台こそ、まさに不知火海・球磨川流域圏に位置する大野村（現・氷川町大野）の一角だったわけだ。言わば、この流域圏は、日本考古学の黎明期のドラマの舞台の一つ、肥後考古学研究の原点の地だったわけだ。そしてそこでの話題は、明治期・大正期、考古学者が絶えず眼差しを注いできた貝塚と装飾古墳でもあった。

ところで、明治期、大正期、昭和初期、肥後の考古学研究は、外部の考古学者の来肥や発言を基軸にして進んでいった。例えば、東京帝国大学や東京人類学会で考古学研究が進んだ明治期には、初代教授の坪井正五郎や助手若林勝邦の他、それに関係した寺石正路や野中完一、大野延太郎（雲外）、八木奘三郎、佐藤傳藏、武藤虎太などの研究者がいた。また、東京帝室博物館の三宅米吉、和田千吉などもいた。それが京都帝国大学に考古学講座が解説され、歴史学としての考古学が確立した大正期になると、初代教授の濱田耕作、その弟子の梅原末治などが続々と来肥しての調査に臨んだのだった。この他に東京都帝国大学の柴田常恵、宮内省の増田于信、帝室博物館の關保之助も加わった。さらに、明治期の日本人起源論を止揚した、新たな日本人論が登場するや、清野健次などの解剖学者も貝塚や古墳から人骨を掘り出していった。

こうした外部研究者の来肥は、肥後の知識人の好奇心に少なからずぐった。例えば、第五高等学校のドイツ語教授の賀来熊次郎がそうだった。また、肥後最初の考古学者と評することのできる熊本師範学校教諭の福原

岱郎や鹿本中学校教諭の波多巖もいた。こうした傾向は、次の大正期にはさらに激しくなった。濱田や梅原等に触発されるかたちで、熊本教育会史跡調査部のメンバーの熊本県属の矢野寛、熊本県第一師範学校の角田政治、熊本県立中学済々黉の下林繁夫、私立鎮西中学校の古賀徳義、熊本県立中学済々黉の平野乍等が、肥後の考古学を牽引していった。

このような大正期の動静を踏まえて到達したのが、昭和初期の肥後の考古学だった。例えば、地歴科教諭の研鑽組織として組織された熊本市歴史研究会・熊本地歴研究会がそれ。また、鳥居龍蔵の来肥がきっかけとなった肥後考古学会の創立もそうだった。ここに、肥後考古学の牽引者は、熊本県教育会史跡調査部から、民間の研究団体にバトンタッチされたのだった。今日の肥後の考古学研究の姿は、この段階に形作られたとって過言ではないだろう。

拙著は、地域への、科学的な学問の波及の実際を、考古学の面から読み解こうと起稿したもの。現代社会が何なのか、のテーゼを問うためには、こうした学史研究は様々なジャンルに於いて、必要不可欠なものと思われてならない。



訳書紹介 林裕美子  
日本の木と伝統木工芸  
メヒティル・メルツ著

森の樹木には年輪が刻まれています。木材として利用されるときには、原木を製材する方向によって、材の表面にさまざまな年輪の模様が現われます。直線が平行に並ぶ柾目（まさめ）、山形の模様が連なる板目（いため）、虎の毛皮の模様のような虎斑（とらふ）など、こうした木目（もくめ）にはさまざまな名前がつけられ、木工品や木造家屋に使われてきました。

ドイツで家具職人の修行を積んだ著者のメルツさんは、木材の美しさに魅せられ、アジア美術史や植物民族学を学ぶ中で日本の伝統的な木工技術に興味を持ちました。そして日本語を学んで来日し、伝統的な木工品を製作する工芸家に聞き取り調査をして、なぜ日本の木工技術は優れているのかを調べることにしたのです。本書では、工芸家の生の言葉を引用したり、実際の工芸品を例に挙げたりしながら、どのように木を扱えば優れた木工品が生まれるのか、仏像の表情が木目によってどのように変化するのか、なぜ木目を美しいと感じるのか、といったことが論じられます。

私は、てるはの森の会が開催した照葉樹林研究フォーラムに参加してくれたメルツさんに2010年に初めて会いました。そのあと2011年に英語の原著が出版され、日本語に翻訳することにしたメルツさんから2013年に連絡をもらいました。照葉樹林のことも少し書かれていて、クスノキとカヤについては詳しく書かれているという説明を受け、翻訳を引き受けることにしました。木工芸は私が得意とする分野ではなかったので、訳すのに少々時間がかかりましたが、メルツさんが巻末につけてくれた木材名や道具類の日英仏独の用語集を参考にしながら、昨年やっと日本語版が出版されました。

京都での打ち合わせのあと、一緒に京都駅へ帰る道すがら土産物屋をのぞいたら、色の違う白木の小皿が並べられていたことがあります。小皿の裏には、素材の樹種が書かれたメモが添えられていました。メルツさんはそのメモを見ずに、色と手触りと手に取った重さから、すべての小皿の樹種を言い当てました。自分は木材の樹種を見分けるプロなのだと言って笑っていましたが、木を愛する気持ちが伝わってきました。日本の木の文化を高

く評価する西欧の木材鑑定家の著作をどうぞお楽しみください。私はこの本を翻訳してから、それまで手荒く扱っていたケヤキのバレッタ（髪留め）を頻繁に磨くようになったり、博物館に木工品があると自然に目が行くようになったりしました。



訳書の紹介 林裕美子  
貝と文明 ヘレン・スケールズ著  
築地書館 2016年発行 本体2700円+税

宮崎で砂浜保全活動をするようになったきっかけはウミガメの調査でしたが、昼間にウミガメ上陸の足跡を探していると、浜に打ち上げられた貝殻にどうしても目が行きます。大きな巻貝はなかなか拾えませんが、二枚貝は大小さまざまな美しいものがたくさん落ちています。コレクションが徐々に増えていき、そのうち置き場に困るようになりました。そこで、名前を調べて記録をとり、貝殻はほしい人に差し上げることにしました。名前を調べるようになると、見分けられる貝殻の種類がどんどん増えていきます。どうしてあのような独特の形をしているのだろうか、海の中ではどんなところに棲んでいるのだろうか、今度は生き様のことも気になり始めました。

そのような時期に、築地書館が『貝と文明』（原題

Spirals in Time、ヘレン・スケールズ著）を翻訳しませんかと連絡をくれました。以前の翻訳でお世話になった編集者（橋本ひとみさん）が推薦してくれたのです。貝殻についての本の翻訳なんて、願ったりかなったりです。少々いそがしくなるけれども、二つ返事で引き受けて翻訳が始まりました。それまで貝殻を集めて名前を調べた経験がおおいに役立ちました。

この本では、軟体動物についての研究業績や保全活動が次々と紹介されます。たとえば「アオイガイ」は、長いあいだヨーロッパでは、どのような動物が作るのかわかりませんでした。貝殻の中からタコが見つかることはあったのですが、そのタコがつくる殻だと明らかにしたのは、イタリアの自宅に巨大な水槽をつくってアオイガイを飼育・観察した女性でした。また「海の絹」は、地中海に生息する大きなシシリアタイラギの根っこのようなヒゲから作られました。ギリシャ時代からの記録を調べた本が出版され、著者はイタリアへ行って現在も作られているのかを確認しています。小さな「海の蝶」という世界中の海に生息する巻貝の話も出てきます（貝殻を捨てたものは英語で「海の天使」と呼ばれ、日本のテレビなどでは「クリオネ」と紹介されます）。海の酸性化が徐々に進行することで、海の蝶の薄い貝殻が溶け始めていないかを調べている人たちに取材しています。そのほか、貨幣に使われたタカラガイが引き起こしたインフレ、貝殻の仮想博物館の建設、貝が自分の殻に模様を描く理由、イモガイの猛毒の有効活用など、人と軟体動物が関わり合ってきたようすが楽しく描かれます。日本では「貝」と聞くと、食べておいしいかどうかに関心が向きがちですが、そういう日常を少し離れて、海岸を歩いて貝殻を拾ったり、軟体動物の世界をのぞきこんだりする非日常を楽しんでみませんか。



## 会員紹介

さいとうためお  
齋藤為男



新会員の齋藤と申します。私は歴史・旅が好きで、何でも自分の目で観てみたいという思いが強い人間です。

亡き父も長崎県小浜町出身です。家族で商店と温泉をやっていました。3男ということで、八代へ幼い年で養子にきました。温泉の名も、亡き父の母の名で“おたっちゃん湯”と言います。数年前に長崎県文化財に指定されました。大人入浴料3銭、子供半額の時代です。日の出から、地元の人々の為に温泉を開けています。熊本新港からフェリーに乗り、島原港までの1時間、景色最高です。年一回の先祖の墓参りが楽しみです。

どこでも行く度に、新しい発見があります。農家ということで、水に感謝する気持ちがありまして、球磨川水源にも行ってみました。

健康なうちに、学会の皆様にご指導を受けながら、一歩ずつ進む気持ちです。どうかよろしくお願ひします。

かわかみきちこ  
川上 径子



県立大学に勤務する友人の佐藤美智恵さんに誘われたのがきっかけで、流域圏学会に入会しました。多様な専門の先生方の講義にこれまで未知の分野に目を開かせられ、また現地見学会は有意義かつ楽しいものでした。夜の親睦会は普段私が接することのないような会員の皆様と交流できるという貴重な時間です。自然保護、環境問題は世界的課題ですが、まず足元に目を向け、私なりにできることはないか模索しつつ、これからも学会に参加したいと思っています。

さとうみちえ  
佐藤美智恵



平成19年5月から当時環境共生学部長の大和田紘一先生の秘書を務めていたご縁で、流域圏学会との出会いがありました。もともと文系の私にとっては、見るもの聞くもの全てが新鮮でした。しかも各分野の識者の先生方が私のような門外漢にも丁寧に説明してくださるので、いっそう興味が深まり、貴重な体験となりました。今後とも自身の知識や視野を広げるフィールドとして関わっていききたいと思いますし、微力ながらお役に立てれば幸いです。(熊本県立大学嘱託職員)



## 「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売



### ■最新号 vol. 10 No.1 (2016年)

1,000円

【原著論文】九州球磨川の荒瀬ダム撤去による河川環境の変化の地球化学的考察・・・石賀裕明・林優子

【原著論文】八代海の生物多様性の検討—市民調査法による周回調査・・・榎本輝樹・青木美鈴・中川雅博・佐々木美貴・多留聖典・森啓介・つる祥子・鈴木孝男

【研究ノート】球磨川流域における自然再生に向けた取り組みについて・・・荒木和幸

【研究ノート】八代漁協におけるアサリ増殖の取り組み・・・藤原成治

【流域いろいろ】球磨川萩原堤のはねの残存状況と保存活用の提案・・・梅木氣・椎葉将人・溝口稔也・磯田節子・森山学

【流域いろいろ】球磨川の舟運—舟止事件—・・・上村雄一

【平成27年度研究会発表記録】流域生態圏管理の考え方について—「森林環境と流域生態圏管理（小山滋編著）の視点—・・・小山滋

### vol. 9 (2016年) 1,000円

【原著論文】球磨川水系川辺川における過去95年間の豊水、平水、低水、濁水比流量の長期変動／蔵治光一郎

【原著論文】シカメガキ（クマモト・オイスター）養殖の過去・現在・未来／永田大生

【原著論文】ヒジキ増殖手法の確立と普及に向けた取り組み／長山公紀

【原著論文】八代海佐敷干潟におけるアサリ個体群の季節変動／徳永吉宏・原口浩一・八里政夫・堤裕昭・一宮睦雄

【研究ノート】茶不況期における熊本県の茶生産構造／新井 祥穂

【流域いろいろ】最近の天草でのスキューバダイビング／中野 誠志

【平成25年度研究会発表記録】人吉・球磨のおもしろ考古学／木崎 康弘

※創刊号 vol. 1 (CD販売のみ), vol. 2～vol. 9の在庫もあります。

■申込方法：下記宛に必要な部数、お名前、ご住所、送り先をお知らせ下さい。

・E-mail：tsuru.shoko@gmail.com（総務：つる祥子）

・facebook「不知火海・球磨川流域圏学会」<https://www.facebook.com/shiranuikuma>のメッセージ欄

※10冊以上は、割引サービスがあります。

■お願い：図書館や公民館など学会誌を購入して下さるところをご紹介下さい。